

優秀賞 東京都 駒崎 流土 様 (中学生)

私はフィリピンで生まれ、6歳から日本で育った中学3年生です。兄が3人おり、長兄はイギリス、次兄はブルガリア、私は両親と三兄とともに日本で暮らしています。家族や友人がさまざまな国で生活していることもあり、自然と各国の社会の仕組み、特に「公的年金制度」に興味を持ちました。調べていくうちに、日本の制度がとても安定していて、多くの人にとって安心できる仕組みであることを知りました。

現在の日本の年金制度は、「国民皆年金」と呼ばれる仕組みが基盤になっています。20歳以上60歳未満のすべての人が、職業や収入に関係なく何らかの年金制度に加入する形になっているため、すべての人が将来、一定の年金を受け取ることができます。

このような制度ができるまでには、色々と紆余曲折がありました。日本における最初の公的年金制度は1942年に始まりましたが、当時は軍需産業で働く一部の人が対象でした。その後、戦後の経済復興を進めながら年金制度の整備を進め、1954年には会社員向けの厚生年金が導入され、1961年にはついに自営業者や農業に従事する人なども含めた国民全員を対象にした「国民年金」がスタートしました。これが現在の「国民皆年金」の始まりです。

その後も年金制度は何度も改革されてきました。少子高齢化が進み、働く人が減る一方で年金を受け取る人が増えてきたため、2004年には「マクロ経済スライド」という調整機能を導入することにより、年金制度がこれからも持続できる形になりました。このように、年金制度は長い時間をかけ、何度も改善されながら現在のかたちになりました。

私は、兄たちが住んでいるイギリスやブルガリアの年金制度と比較することで、日本の制度の良さをより実感することができました。

たとえばイギリスでは、一定期間保険料を納めれば国の年金を受け取れますが、その金額はあまり高くありません。このため、職場での年金や個人で積み立てる年金にも加入するなどの自助努力が欠かせません。企業に対して従業員を自動的に職場年金に加入させる「オート・エンロールメント」という仕組みも導入していますが、すべての人が十分な年金をもらえるまでには至っていません。

一方、ブルガリアでは、かつての社会主義時代の制度を引き継ぎながらも、現在は制度改

革が進んでいます。しかし、年金だけで生活するのが難しいという高齢者が多く、家族からの支援に頼らざるを得ないのが実情です。企業年金や個人年金もありますが、それほど普及しておらず、公的年金だけでは十分ではありません。

比較してみると、日本の制度は「すべての人が加入し、最低限の生活を保障する」という、とても公平で安心できる仕組みだと感じます。そして、その最低限の生活というものが、とてもレベルの高い水準だとも感じます。さらに、厚生年金によって、より手厚い保障を受けられるようになっている点も、他の国にはあまり見られない特徴だと思います。

もちろん、日本の制度にも課題があります。少子高齢化によって保険料を納める人が減る一方で、受け取る人が増えるため、将来的に年金の金額が下がる可能性もあります。それでも、今の制度を壊してしまえば、これまで築いてきた信頼や公平性を失ってしまうおそれがあります。だからこそ、制度の良い部分を守りながら、時代に合わせて見直しを続けることが大切だと思います。

そんな中、中学生である私たちにできることは何でしょうか。確かに、年金制度を直接変えることはできませんし、保険料を納める立場でもありませんが、それでも、私たちにもできることがあります。

まず大切なのは、「知ること」です。日本の年金制度がどのような仕組みなのか、なぜ必要なのかをしっかりと理解すること。そして、友だちや家族とそのことについて話し合うことで、制度そのものを理解するだけでなく、他の人の考えも知ることができますし、自分の意見をもつこともできます。さらに、社会のニュースに関心を持ち、制度の今後について自分なりに考えてみることも、とても大切な行動だと思います。

これにより、年金制度を支える一人として、責任を持って行動できる心構えができます。よくわからないままでは、特に若いうちには負担感だけが募ってしまいましたが、年金は、高齢者のためだけでなく、将来の自分自身を支えるものでもあることが理解できます。

私は、世界のさまざまな年金制度を知ることによって、日本の制度の良さやありがたさを改めて感じました。そして、中学生の自分でも、日本の年金制度を支える一歩を踏み出せることに気づきました。この制度を大切にし、未来に引き継いでいくために、これからも関心を持ち続けていきたいと思っています。